

< 論文 > 納西族と漢族の通婚に関する一考察

著者	李 近春, 荒屋 豊 (訳)
雑誌名	比較民俗研究 : for Asian folklore studies
号	3
ページ	18-25
発行年	1991-03-31
その他のタイトル	<Articles>A Study of Intermarriage between Nashi and Han Peoples
URL	http://hdl.handle.net/2241/14214

納西族と漢族の通婚に関する一考察

李 近春[※]

1. 導論

納西族は悠久な歴史と文化をもつ民族である。漢文献の記載によると、その先民は“摩娑”，“磨些”，“麼西”，“摩娑”，“摩梭”，等と名付けられてきた。漢・晋以前にすでに現在の大渡河，雅砻江，安寧河，金沙江諸流域の広大な地区に生息し，牧畜業を主要な生産手段としていた。塩源地区では塩，鉄，漆等の単純な採掘も行われていた。唐代には，唐，吐蕃，南詔の三大国家のはざまに置かれたため，絶えず戦争と遷徙を繰り返し，一部の磨些人は周辺の民族に融合していった。しかしながら，金沙江（磨些江）に集居していた磨些人は自然の障壁を利用しつつ，三大国家の間を巧妙に周旋し，同系統の越析詔（磨沙詔）と婚姻関係を結びつつ，南詔とも通婚した。また，南詔朝觀唐朝皇帝使団の“導從”に当てられた。磨些人はさらに，鉄橋城（今の麗江塔城）付近に雑居する“漢裳人”とも融合した。宋代に入ると，漢族王朝と吐蕃政権は内政で手一杯であり，外圧に脅かされずに内部で相互に不干渉な郡酋が勃興している局面が形成された。宋末になると，モンゴルのフビライと兀良合台が中・西路軍を率いて，大理を討つべく南進したが，金沙江を通りかかったとき，九賧（現在の巨甸），大匱（現在の大具一帯）の磨些酋長の抵抗に遭った。唯一，“土地が肥沃で人材豊富”な三賧（麗江壇区）磨些酋長麦良は戦わずして川べりに退去し，モンゴル軍が近隣の部落を撃破し，大理を征服するのを援助し，そして，勢いに乗じて磨些地区を統一した。麦良は功績により一府，七州，一県の麗江路軍民総管府土知府の管轄権を与えられた。麗江はこれより正式に元王朝の一級地方行政系統に組み込まれ，雲南西北と納西族の政治・経済・文化の中心地になったのである。そして，麦良及びその末裔もこれを契機に，麗江地区を470年間統治する過程に入ったのである。明代には，麗江軍民府は四州，一県を管轄するのみであったが，木氏土管の勢力は元代管轄地区の範囲の外，つまり，今日の納西族の主要分布地域である雲南西北，四川西南，チベット東南が交差する区域に拡張した。尚，元，明代の納西族の分布には大きな変化はない。雲南西北の麗江納西族自治県は納西族主要集居区であり，人口約18万人である。これは，納西族全体の人口約25万人の70%を占める。そのため，一般に納西族を論じるとき，麗江の納西族を指す場合が多い。納西族は上述の歴史条件と現実生活の中で，周辺のチベット，イ，パー，漢，リス，プミ等の諸民族と共生し，交流しあってきた。経済的に一衣帯水で，有無を通じあっており，文化的にも相互に伝播しあってきた。民族接触中互いに融合

※中国社会科学院民族研究所副研究員／中国民族学会秘書長

しあい、又、諸関係が密接なため、自然に民族間に相互的な通婚が行われてきた。そして、民族間の相互的な通婚は諸民族の間の密接な関係を促進し、強化させたのである。

2. 納西族と漢族の通婚の歴史と現状

仮に明代から計算しても、納西族と漢族の通婚はすでに600年以上の歴史があり、各時代にはいささか異なった特徴がある。

明代鍾元故事には、周境民族に対し“その旧を改めず、俗に従い執行する”政策を実行した、とある。明太祖は民衆を収めるには恩賜に帰順すると考え、雲南統一に功績のあった麦良の4世代後の孫である阿得に“木”の姓を与え、麗江軍民府知府を木氏が世襲する職とし、その管理にあたらせた。洪武年間から清の雍正元年の改土帰流にいたるまで、木氏各代土管は中央の王朝に対して使者を派遣することを認め、貢ぎ物をして、また戦争に参加する忠功の義務に全力を尽くした。明王朝も木氏を西南地方を安定させる防波堤として依拠を強め、特別の封奨を与えた。木氏はその統治期間中、中原文明を慕い、漢族の先進文化を吸収した。例えば、楊慎、張志淳、徐霞客等の文学名士と交際したり、“万卷楼”を建て文人を輩出し、多くの詩文を世に伝えた。また、景東、蒙化、順寧、武定、姚鶴慶、寧州、邓川、北勝、蘭州、劍州、永寧、左所等の府・州における諸族の土管と互に通婚し、政治的影響力を拡張した。同時に、管轄区内では水路を修復し、道路を作り、莊園を經營した。また、金、銀、銅、鉄銅、塩井等を採掘した。刻銅やじゅうたん等の手工芸も発展し、チベットとの貿易を独占した。更に漢族、チベット族の内容的にも性質的にも異なった各種の宗教と文化を吸収し、白沙、東河、府治に漢族風の大宝積宮、琉璃殿、大定閣、福国寺、大覚宮、護法堂、忠義石碑等を建設した。そのため、明代中葉以降には“雲南諸土官中詩書を知り、礼儀と忠義を重んじるのは、麗江木氏をもって第一位をなす”¹⁾とされ、“貯金は数十個”であり、“鉄の生産を独占し、その富を諸土群のために尽くし”“宮室の麗しさは、王者に似て”²⁾、経済・政治・軍事上、雲南とチベットの両側で、“薩当汗”(チベット語で麗江王の意味)として君臨した。明初から中央王朝は雲南を統一するために麗江駐屯の大軍卒を派遣したが、木氏土官は内地から募った通訳、教師、医者、建築士、各種の技師と大工、そして、流れ者及び商人を、ほとんど例外なく“齊民”に編入し、“和”という姓を強制し、木氏の許可がなければ、勝手に出入りをするを許さなかった。これらの漢族軍と民衆の大部分はこの地の婦女と結婚し、服を変えて俗に従い、「納西族化」していった。そのため、明末に、徐霞客が自ら調査したことを書いた『槇遊日記』では、その“その土地の人は皆麼梭である。国初、漢人の駐屯者は今は皆その俗に従った。国初には軍民府とされたが、今は軍があるのを知らない。ただ官・民二姓に分かれ、官は木姓、民は和姓であり、その他の姓はない。”³⁾と記している。

清朝雍正元年(1723年)に、麗江は流官知府に改められ、土知府が土通判に格下げになった後、木氏の庄田の多くは官に帰せられ、家族は里に入り民となった。その各里の住宅は衛署とされ、財物は公的な費用に当てられた。政治機構は改変され、朝廷から派遣された流官は直接田畑・戸

籍の地租税金を掌握し、鉾山を継承して、塩井や茶の専売をおこなった。商品の過酷な税は免除され、土官独特の政治・財務・軍事・文化の大権を解除したため、木氏土官の世襲統治は終わりをつげた。そして、中央と地方、内地と辺境の各方面のパイプが開かれ、内地漢族の各種の人達が麗江に入ってくる数も倍増し、納西族と漢族の間の通婚もそれに応じて増加した。以下に幾つかの例を挙げよう。

清代には禄営兵制が実行され、関、哨、汛、塘が設置された。麗江には雪山関等の6関、大来哨等の24哨、石鼓汛等の18汛、团山塘等の68塘が設置された。数多くの山区の要害の地にある116の主要な軍事的交通の拠点には、全て内地派遣されたか募集して来た漢族軍戸と兵士が常に駐屯していた。駐屯地は徐々に開発され、多くの大小異なった村落が集居した。これが今日麗江関の山の要害間に漢族の村落がある理由である。これらの漢族軍戸と兵士は最初は妻室を伴っていたり、お互いに通婚したり、“夷婦”を娶ったりしていた。しかし、かれらの後代は普遍的にこの地の民族と通婚した。その中の一部は婚姻関係を通じて、俗に従い納西族の少数民族中に融合していった。

雍正、乾隆年間には改土帰流と開放に伴い生産が発展し、周囲の経済関係が強化され、内地とチベット地区を結ぶ貿易の要地である麗江には府市があり、又、人白沙、東河等には48の日市、夜市、定期の小集市があった。諸民族間の交換はより一層発展し、かなりの程度繁栄した。外来商人、特に漢族商人で、麗江に貿易にやってくる者が頻繁になった。清末になると、近くは、省内の鶴慶、喜州、大理、騰冲、昆明、遠くは、四川、湖南、江西、山東、北京等の商人が麗江に商店を設け、内地とチベット地区間の交易を行った。各地から来た行商と露店は更に多かった。ある者は家族を引き連れて、またある者は単身でやって来て、一般に繁栄し交通に便利な集鎮に雑居した。土地の民族と密接な関係を持ち、相互の通婚は普遍的であった。往々として一、二代を経ると、かなり多くの家庭は自然に「納西族化」していった。ある家庭では半分は納西族で、半分は漢族であり、また、多種の言語を操る多民族成分を含んだ家庭に変わった。今日の麗江県城大研鎮、石鼓、巨甸、ではこのような家庭が多く、そのような人々は納西族と自称するのを好んだ。

清代の流管の多くは辺境の開発を重視した。府学、書院、義学管、広建寺廟寺の文化施設をつくるのに熱心であっただけでなく、資源の開発と手工業等の事業にも着手した。当時の府が着手したのは、麗江回龍銀場、北地坪鉛場、老姆井八区塩井、及び金、銀、銅、毛皮、紡績、紙、建築、活字印刷等である。鉾場、塩井の採掘者の多くも集居し、納西族村落から離れていて納西婦女と結婚する者は少なかった。その他の手工業人も納西族中に散居したが、多数が麗江に寄留し、その地の婦女と結婚した。その中の多くの民家には今でも家譜がのこっており、また先人の来歴も知っているが、しかし、すでに本物の納西族になっていた。

改土帰流から光緒末年まで、麗江納西族の子弟は内地を転戦している士卒や将領に従軍する者がいた。また、科挙の試験を受け合格した後、京城で職に付き、あるいは内地の府、州、県管及び教諭となった。またある者は、内地に商売をしにいった。しかしながら、少数の内地に籍を持

つ者、任地で殉職した者、病死者を除き、納西族の婦女を妻にめとり、故郷に帰り晩年を過ごした。現時点では、麗江の婦女が内地の者に嫁いだ関連資料を発見することができない。

民国時期の30年間、戦争が頻繁に行われ、盗賊も相次ぎ現れ、内外の交流も断続的におこなわれた。しかし、抗日戦争の時期、雲南公路が切断された後、麗江は内地がチベット、インドと交易する主要なルートとなったため、非常に繁栄し、教育事業も長足の進歩があった。そのため、内外の漢人が麗江で店を開いたり、商売をするものが増え、また、内地の教師及びその他の職業に従事するため麗江に来る者も多かった。同時に、納西族子弟が内地に勉強をしにいたり、軍や政治に参加したり、商売をするものが以前より倍増した。納西族と漢族が交流するなかで、漢族が麗江に住み着き、納西族の婦女を娶ったり、娶った後、内地に連れて返ったりした。同時に、即ち納西族と漢族の間で明清時代に多種の交流と相互の結婚が始まったことを示しているが、相変わらずその数は多くなかった。

新中国建国の40年間、麗江と内地の間で、納西族と漢族の交流はまだまだかつてないほど昂まり、通婚もこれより一つの新しい時期に入った。この時期の通婚には二つの顕著な特徴がある。

第一の特徴は「工作」と事業発展の需要のため、漢族が麗江に流入し納西族が内地に流入した後、自然に合法的な納西族と漢族の婚姻関係が発生したことであるが、この需要は二つの方面から説明できる。

一つは、麗江の開放に伴って政権（麗江県と麗江行署を包括する）が打ち建てられ、各種の建設事業が創設・発展し民族政策を実施する需要が貫徹され、万にのぼる漢族が麗江に流入した。その中には、50年代初めに南下した幹部、以後断続的に配置転換されやって来た幹部、教師、医者、技術士と職人が含まれていた。麗江行署と県府の所在地であり、人口が最も集中した大研鎮を例に取れば漢族人口の変動はこのようである。民国34年（1945）の戸籍統計資料によると、大研鎮は1329戸、8600人であった。新しく籍を入れたものは76戸、302人であり、明らかに主に漢族を指すものである。1949年に麗江が開放された時期については寄るべき資料がないが、大研鎮の漢族は多くとも千人を越えるはずはないと思われる。しかし、1982年にこの地区の漢族は14786人に達していた。⁴⁾ 全県から見ると、1964年には、漢族は36135人、1982年に到っては56231人に増加した。麗江に居住した漢族が自然に増長したのを除いても、建国後には大規模に漢族が流入したのである。これらの各省からきた漢族（多くは未婚の男性）の10人中3、4人は納西婦女と通婚し居住した。その後、彼等の青年子女が相互に通婚したのは言うまでもない。人々と親しくなり、また土地にも慣れてしまったので、多くの仕事を退職した者も、内地の原籍に戻らなかった。

もう一つは、納西族子弟（女性は少ない、以下も同じ）が仕事と国家建設の需要のため、省内の大・中・小都市に万近く（少数の家族伴った者も含む）流入した。その中には、建国初期にやって来た党の幹部、部隊から地方の仕事に移ったものもいた。各部門の技術訓練班或るいは交通、郵便、財貿等の単位で仕事に当たった。しかし、大多数は上・中等専門学校を経て、大学に入り、卒業後内地で科学技術研究、教育、医術、文化等の方面の仕事に留まった。上述の内地に流

入した納西族中・省内各地に留まった者は3分の2以上を占める。以下に統計により、納西族人口流動の状況を説明しよう。1956年雲南省民委の調査統計では、昆明市における当時の納西族はたったの423人であったが、1982年には2612人に達した。大理地区では、元々222人であったのが、1982年には大理市の大理県と下関では7万3千人になった。東川鉦区では2人であったのが、1982年の東川市では347人に達した。原蒙自地区では9人であったのが、1982年の開遠市では216人になった。楚雄地区では9人であったのが、1982年の楚雄市では105人になった。更にかつて納西族が居住していなかった西潞、保山、馬関県では、1982年にはそれぞれ331人、126人、113人になった。上述の人々の中で、少数の民族内部の結婚を除いて、多数は漢族及びその他の民族と結婚した。しかし、外省に散居している数も多く、中城市の2千人あまりの大多数は漢族婦女を妻に娶った。筆者が京安家の40戸の納西族家庭による調査を試みたところ、36戸は漢族と婚姻関係にあり、全体の85%を占めるのに対し、民族内部での婚姻関係を結んだものは15%である。この40戸は特例を除き、1950、60年代に京にきたものであり、彼等の成年子女の中で民族内部で結婚した者はまだ発見されてない。これも、納西族と漢族の間の婚姻関係を説明する一例と言えよう。

ここで指摘しておきたいことは、漢族が麗江で納西族婦女と通婚するにせよ、納西族が内地で漢族婦女と通婚するにせよ、多くは科学技術研究、教育、幹部、職人に限られていることである。つまり、職業の階層及び制限があり、みな正式な交流の前提下で結実した合法的な婚姻関係なので、人々の支持と激励を受けたものであった。そのため、この類の納西族と漢族の間の婚姻関係は継続的に発展した。

第2の特徴は、麗江と内地の経済文化関係の強化、とりわけ改革・開放の深まりと人々の頻繁な交流は納西族農村婦女が内地に流出し、漢族農民が麗江に恋人を探しにくる相互的な婚姻関係を結ぶ新状況が出現したことである。この類の婚姻関係にはかつてなかった複雑な問題が存在している。以下に幾つか例を挙げよう。

第一に、麗江農村婦女（漢、白、働働、苗族等もいるが、大多数は納西族である。以下も同じ。）が外に流出したのは、70年代に漢族が比較的多い金沙江付近一帯から始まり、次第に納西族集居地区に広がり、最後に多民族雑居の山地区に波及した。80年代に2回大きな外への流出の波があった。彼等が娶った漢族農民は分布は、浙、閩、贛、皖、粵、湘、鄂、蘇、滬、魯、冀、豫、晋、陝、川、黔等16地区の市にある85県である。この種の麗江各村を席捲する外の地域との婚姻関係の波は、完全にかつての納西族と漢族の婚姻関係を結ぶ人達の階級と限界と地区を打ち破った。

第二に、麗江農村婦女が外に流出する情勢の変化。外に流出する婦女が年ごとに増えている。1988年4月の不完全な統計によると、上述の婦女1566人中、1970年から1985年までに外へと流出したものは923人、年平均6115人であった。しかし、1986年から1987年には643人であり、年平均3215人に達した⁵⁾。また、外に流出した婦女中、婚齢期に達してない者とすでに婚姻した者がふえた。1986年から1987年までに、婚齢期にたっていない者は178人にのぼり、その中には学校で勉強している少女までいた。1985年以前はすでに結婚している者が181人で、外に流出した者

の総数の13.19%を占めたが、1986年から1987年までには181人となり、28.1%を占めるにいった。その中の多くの婦女は幼い子供を連れて居た。婦女の流出は年ごとに増加しているが、同時に麗江で結婚手続きと戸籍移動手続きをする者が次第に減少している。

第三に、納西族と漢族の婚姻関係には、合法的なもの、違法的なもの、少数の犯罪活動など複雑な錯綜した状況が存在したことである。

合法的な婚姻は中介人の紹介を経て双方が見合いをしたあと、双方がねんごろになり家族の同意を得て、同時に麗江あるいは内地で法的な手続きをし、政府の支持と激励を受ける。

違法的な婚姻は以下の幾つかのケースを包括する。まず、双方が適齢に達しているが、法的な手続きを踏まず契りを交わした者である。次に、女性がまだ適齢に達していないにもかかわらず、事実上婚姻した者である。この種の違法婚姻は大多数が人の紹介を経て、男性に連れていかれたものであり、その中の多数は祝日や街をぶらついていたり、友人宅を訪れたときや仕事或は副業をしている際、機会を見つけて女性に実家に知らせないで連れていってしまう類である。中介人は報酬として“紹介費”を受け取るのである。些細な事は後で法的な手続きによって補えるが、家庭の心配と恐れ及び社会の動揺は減少しない。

ある関係部門が掌握した事実によると、確実に少数の悪人が内外でつながっており、地下連絡網や秘密の宿を作っている。そして、数々の偽瞞的な手口を用い、婦女を内地に誘拐した後、他人に妻として売るのである。このような犯罪活動は社会の不安定要素となっている。

調査が示すところによると、納西族と漢族の間の婚姻関係には異なった状況があり、存在する問題も複雑かつ錯綜している。しかし経済生活条件を考慮すれば、疑いなく婚姻関係を促している主要な原因と言えるだろう。内地農村の比較的年齢の高い男性から見ると歴史的な原因と自身の条件等の制限により、年齢に適した当地の女性を探すことができなかった。その多くは当地の妻を娶るほど経済的余裕がなかったのである。しかしながら、家を相続させる願望が強いいため、しかたなく辺境の安い金銭で済む辺境の婦女を妻として買うのである。民族地区内部の農村婦女から見ると、彼女たちは内地はなんでも素晴らしいと思ひ込み、故郷を離れ比較的よい生活環境と条件を得ようと思うのである。このような強烈な願望下に、中介人を経て接触し、あわただし合法・違法に係わらず、結婚してだまされるのである。

実際の状況が示すところによると、内地と辺境の経済的発展の不均衡と格差の激しい条件下において、横の経済文化連係の強化につれて、人々の接触する機会は増加し、婚姻のパイプも開かれ、少数民族と漢族農民の婚姻の継続は必然的であり、また社会の進歩である。目下の課題はそれぞれの地方の指導者が新情勢下における各民族の婚姻問題を重視すること、群集と幹部に対して民族政策と婚姻法を中心とした法制を実地するよう教育すること、思想的見地から積極的に指導すること、等である。そして、行政と法律等の手段を用い民族間、とりわけ少数民族と漢族農民の婚姻を正常な法制に基づき軌道に乗せねばならない。

3. 納西族と漢族の婚姻関係が納西族に及ぼす影響

以上、納西族と漢族の婚姻関係の状況と特徴について基本的な理解を試みてきた。ここまで拝読した読者は“それでは納西族と漢族の通婚が結局のところ納西族にどのような影響を及ぼすのだろうか”と思うに違いない。マクロ的に納西族の歴史と現状を見ると、私はその主要な影響を以下の幾つかの点に概括できるのではないかと考えている。

第一に、納西族の形成と発展に対して単純に先進文明を吸収したところからは生じない民族性の変化を引き起こしたことである。目下掘んだ資料によると、明・清両時期は納西族の形成と発展を考えるうえで重要な時期である。古代羌種摩沙（麼些）人は疑いなく納西族源流の主流であり中核である。“濮婢蛮”などの原住民は納西族の一支、つまり組織部分である。明・清時代に内地から麗江に流入し、納西族婦女と婚姻関係を結び、服を換え俗に従った漢民は納西族の重要な組織成分である。その上、全体民族成分に新鮮な血液をもたらした。摩沙人と原住民は先進文化技術をもたらした漢民と融合することにより、その頑強な生命力を示した。そして、これらの人々とその末裔は過去と現在において、納西族各方面の発展に対し非常に積極的な作用を引き起こした。当時漢民族が流入した数はよるべき資料がないが、しかし、その数が少ないはずはない。このことは二つの事実で佐証することができる。一つは今日麗江大研鎮の納西族が明・清以来の納西族と漢族が婚姻関係を結び融合した末裔である。もう一つはたった25万人の納西族に、なんと70近くの漢族の姓氏が存在することである。これは我国少数民族の中で多く見られることではない。これからみても、漢民族が婚姻関係を通じて納西族に融合した一例を見ることができるであろう。その上、まさにこれらの人は自分の祖先が漢民族血統の納西族であることを知っているがゆえに強烈な納西民族意識を備え、政治・経済・文化活動において、民族凝集の中心となったのである。

第二に、納西族と漢族の婚姻関係は納西族の社会経済に発展を促す作用を果たしたことである。元代以前には、納西族地区は“土地には牛・羊が多く”，不統一であり、しばしば紛争が生じている初期階級社会であった。元代に麦良が麼些各部落を統一し、土官を授与されて以来、とりわけ明代に到って、当地の農業、鉏業、手工業の発展が迅速になった。木氏土官が打ち建てた農奴労働力を主要特徴とした莊園経済が繁栄し、明末・清初に地主経済へ転化した。民国時期、納西族居住地区では地主所有制を確率したばかりでなく、商業資本主義の要素が現れた。生産発展により社会所有制の変化を引き起こしたが、これは、当然先進文化技術の学習と吸収と切り離すことはできない。その中には高い文化と先進技術を備え、また、納西族と漢族双方の血統の納西人を備え、麗江の経済発展中に積極的な作用を引き起こした。民国時期には、麗江に著名な内地、チベット地区、香港、インド、ビルマ、等の商店が立ち並んだ。土地の特産物を作り交易を行った頼、季、牛、習等の家族、大研鎮の主要な商店、著名な手工業師と四方街における多くの屋台はこの方面の代表である。

第三に、納西族と漢族の婚姻は麗江における漢文化教育事業の発展を促進し影響を与えたこと

は、明らかにその他の地区より突出している。明代木氏土官の中に多くの詩人と作家がいたが、“齊民”に勉強させるのを許さなかった。改土帰流以降に“和”という姓名を強制され納西化された“齊民”は、元来の姓名を回復した。彼等及び彼等の末裔は、漢文化を積極的に学習・吸収した。府学、書院、義学館、新学と現代化された学校教育方面、さらに、科挙、大学進学、出国留学と科学技術方面はどれも優秀な人がひしめきあった。さらに、詩人、作家、書家等も納西族は先を争った。

第四に、納西族と漢族の婚姻関係は双方の理解と団結を強めた。彼等は歴史の大河の中で、共同して祖国の辺境を開発し、同時に内地を建設した。又、外敵との攻防を重ね、国家統一を保護し、民族団結を強めた事実は枚挙にいとまがない。このような建設以来の親密な交流、つまり不可分離な納西族と漢族の関係は、より一層前進する時代に向けて足並みを揃え発揚していかなければならない。

<注>

1. 「明史、土司伝」参照。
2. 「徐霞客遊記」槇遊日記七参照。
3. 「徐霞客遊記」巻七880ページ、上海戸籍出版社1980年版
4. 出処者は明記されてないが、度重なる全面的調査で見ることができる。以下も同じ。
5. 外に流出する婦女の状況と数字は麗江県政法委員会の提供によるものだが、筆者も実地調査を行い、「納西族と漢族の婚姻関係に関する新状況と対策建議」という調査報告を書いた。本稿では簡略して論じているにすぎない。

(訳 荒屋 豊／筑波大学大学院地域研究科)

新刊紹介

“中国研究の視角”『文化人類学』8

第5号の“漢族研究の最前線”に引き続いての中国研究特集である。末成道男氏による総括に続き、聶莉莉「親族研究の再検討」、曾士才「民族識別から民族意識へ」、西沢治彦「調査をとおして見えてくる中国農村社会の一断面」、中勝美「村の派閥争い」ジェームス・ワトソン「祖先殺し」、瀬川昌久「畬族と客家」、横山広子「土のカテゴリーからの離脱—白族の本主信仰をめぐる—」、鈴木正崇「龍の顕現—貴州省苗族の世界観の諸相」、谷野典之「ニシャン・

シャマン物語」、長谷川清「タイ族における民族文化の再編と創造」の論文の他、隣接領域からの提言、中国の民俗・民族学の動向紹介からなっている。

ようやく現地調査が可能になり、今後ますます研究の進展が期待される折、時宣を得た企画であり、会員諸氏の一読を勧めたい。

(佐野賢治)

A 5 判 218頁 アカデミア出版会
1990年12月刊行 1,854円